

はしがき

カンナダ語は南インドのカルナータカ州の公用語である。日本の約9倍の面積を持つインドは、12億の人口を擁するが、その南部の5州にドラヴィダ系の言葉を話す人々が暮らしている。一番南の東側のタミル・ナード州ではタミル語、その西側のケーララ州ではマラーヤラム語、東のベンガル湾を上がったアーンドラ・プラデーシュ州とテランガーナ州ではテルグ語、そしてその西側の中央部からアラビア海にかけてのカルナータカ州でカンナダ語が話されている。カルナータカ州は日本の半分ほどの面積で、人口は6100万人ほど、その大部分がカンナダ語を話す。

日本語の起源をタミル語にもとめる説なども出たことからわかるように、ドラヴィダ系の言語はその膠着語的な構造が日本語に似ている。インドの北部で話されているヒンディー語やマラーティー語などの言葉はインド・ヨーロッパ語族に属し、ドラヴィダ系の言語とはまったく構造を別にしてしている。しかしながら、それらのインド・ヨーロッパ語族の言葉の古い時代の文化的な共通語であるサンスクリット語はカンナダ語の語彙の中にも強い影響を保っている。

サンスクリット語は日本では古くは梵語と呼ばれ、その語彙の一部は、仏教を通して日本語に入っている。そうした古来からのつながりに加えて、近年ではカルナータカ州の州都ベンガルール(バンガロール)はインドのIT産業の中心として「インドのシリコンバレー」とも呼ばれ、日本からの自動車産業の進出の一つの拠点ともなっている。日本人駐在員の人口もデリーについて第2位となっているので、この都市を訪れたことのある日本人の数もずっと増えていることと思われる。

しかし、カンナダ語に限らず広くドラヴィダ諸語について見ると、タミル語と日本語の起源の関係についての議論など様々な話題があっても、わが国における研究はようやく始まったばかりといえよう。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において、マラーヤラム語を除くタミル語、カンナダ語、テルグ語の三つの言語の言語研修を1986年から1998年にかけて行ったのは、少しでもその欠落を埋めようとするものであった。しかし現在でも、この言語研修テキスト以外の日本語による書物としては、入門的文法書がタミル語3冊、テルグ語とマラーヤラム語で各1冊あるにすぎない。

このような状況の中で、ここに本格的なカンナダ語・日本語辞典を刊行できることは、両著者の長年にわたる努力の賜物であると同時に、電子出版技術の開発を含む情報処理の側面でそうした努力を支えてきたアジア・アフリカ言語文化研究所、特に、情報資源利用研究センターと文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成(GICAS)」の成果の一端である。

思えば、私がアジア・アフリカ言語文化研究所に奉職した1992年以来、故奈良毅元アジア・アフリカ言語文化研究所教授を代表者とする科学研究費補助金国際学術研究「電算機利用による南アジア諸言語の比較・対照研究」を始めとする様々なプロジェクトで、内田紀彦、ラージャブローヒト両博士と進めてきたカンナダ語・英語・日本語三言語辞書の構築に向けての共同研究は既に20年を越えている。

カンナダ文字と日本語を共に印字することすら困難であった時代であって、カンナダ文字フォントを開発することから、複雑な多言語対照の記述を可能にするデータベース構造の検討、独自文字コードの新聞データからの用例文の収集など、現在の時点ではそれほど困難と思われまいであろうことも、90年代においては多くの創意工夫を必要としたものであった。

多くの先人の業績に基づくと同時に、最新の情報処理技術を用いてもなお、本格的な辞典の編纂には非常に長い時間が必要であり、そうした営みを支える長期的な視野に立つ公的な研究支援なしには、辞書のような知的基盤は容易に実現し得ないことを、多くの皆様に理解していただきたく思う。

本辞典の完成に至るまでの道筋で様々な形でお世話になった方々すべての名をあげることはできない。ドラヴィダ語研究の高橋孝信氏、家本太郎氏、児玉望氏には、インド現地調査においてもお世話になった。同僚ながら、アジア・アフリカ言語文化研究所の町田和彦氏と峰岸真琴氏には多くの学恩を受けた。また、編集の最終段階で様々な点検の労を取っていただいた高崎恵氏、三省堂辞書出版部の皆様、とりわけ編集担当の柳百合氏には心からの感謝を捧げたい。

最後に、長年にわたって報われることの少ない辞典編纂に力を尽くしてこられた二人の著者、B.B. ラージャブローヒト氏と内田紀彦氏、また両氏のご家族の皆様には心からの敬意と、「ご苦勞さまでした」の言葉を贈りたい。

2016年6月10日

高島 淳